留学生論文コンクール審査総評

渡邊啓貴

審査委員長の渡邊啓貴です。本日は授賞式へのご出席有難うございます。また受賞者の皆様おめでとうございます。

2025 年「留学生論文コンクール」には多くの方々に応募いただき心から御礼を申し上げます。合計で 54 人の方が応募されました。2024 年度は 35 人でしたのでそれに比べて大きく増えました。本コンクールの知名度が高まり、多くの留学生の皆さんの関心が高まっていることを大変嬉しく思っています。また提出いただいた学生の所属大学もさまざまで本コンクールの広がりが出てきたことを喜んでいます。御応募いただいた多くの方とご支援いただいた皆さんに心から感謝いたします。

選考に当たっては、論旨、独創性、テーマとの整合性、日本語の表現力という四点からそれぞれの項目についての評価を点数化し、総合評価としました。とくに日本語の表現力については最近では AI による作文も普及していることから、その点も考慮して厳密に審査いたしました。

全体的講評としては、正しい日本語で書かれ、論文構成もしっかりとした応募作品が多かったという印象を審査委員全員が共有しました。

また、今回のテーマは「留学体験を通して発見した新たな目標」でしたが、候補者本人の周辺の身近な体験を扱ったものから、学術研究論文的な作品まで、多種多様な幅広い論文の応募がありました。同時に応募作品の多くは文章力・説明論法・表現の適格性などの点でも前回よりも優れており、本コンクールのレベルの向上を改めて確認することができました。

留学生の論文なので、具体的な日本の文化・社会生活様式と留学生の母国の価値観・生活様式を比較した論文が多かったのは当然ですが、日本特有の防災訓練やごみ処理法などのテーマも例年通りありました。他方で昨年に比べて日本語学習に関する論文は少なくなっていたように思います。

また最近の政治的保守化傾向を反映してか、外国人に対する差別的偏見などの今日の風潮に対する懸念を呈した論文もいくつか見られました。日本人が見過ごしがちな小さな事由の中に留学生ならではの視点から自分と日本社会との関係を考察した論文などには新鮮さが感じられました。

そうした中で選考委員の間で評価が高かったのは、日本的価値観・慣習の希少な体験を通して、長期的視野から国際交流の将来の活性化につながる提案を含む作品でした。なお、学術論文としては高い評価を与えてよいような作品もありましたが、本企画は研究評価を第一義とするものではないので、むしろ日常的体験を通して新たな社会的な目標を見出した論文に高評価を与えました。

金賞を受賞したのは薛雪(セツ・ユキ)さんの「日中の文化的市場共創を支える媒介者を目指して」という作品です。同氏は新潟大学大学院現代文化研究科日本酒学コースの学生ですが、日本酒の製造から販売に関わる全行程そのものが、地域の風土・歴史・生活文化を象徴する総合的な文化システムであることに新しい発見を見出したという指摘は審査員に新鮮な感想を与えました。そうした中で日本酒の輸出は単なる物流ではなく、「価値の翻訳」者の役割を果たしているのであり、日中の共同作業による新たな市場価値を生み出す、創造性の源であると薛さんは指摘しています。留学生ならではのこの指摘には審査委員全員が高い評価を与えました。

銀賞を受賞した徐成佻(ソ　ソンガ)さんの「126 回の献血が拓いた「もう一つの留学」」も審査員の間で高い評価を得ました。これだけ多くの回数の献血体験にまず驚かされたのに加えて、社会学的無償の行為である献血が社会の信頼と倫理的基盤を支える「贈与」であり、信頼・規範などの社会資本の実践の場が献血であるという指摘は印象深いものでした。同時に経済社会学的視点を踏まえたところは説得力のあるものでした。

もう一人の銀賞受賞者 Zhumageldina・Aruzhan ジュマゲルディナ・アルジャンさんの作品「日本における文化と宗教の統合」は日常生活習慣の違いの克服を「意識的な適応」を通して成功した例を挙げています。同氏はイスラム教徒なので平和的な儀式として日本社会での公共の場での静粛さの保持や丁寧なあいさつ表現などは親しみやすい点だが、ハラール食品でない会食への出席の際の工夫を挙げています。適切な文章表現とともに素朴な留学体験記でありながら好感の持てる論文でした。

銅賞は、LEVEQUE・Rebecca・Victoria レベック・レベッカ・ヴィクトリアさん、何佳鑫(カケイキン)さん、詹雪櫻(センユキオ)さんの三名に決定しました。地方市役所で国際交流員として多文化共生の現場で働きながらもその現実に疑問を感じ、あらたに大学院で地域日本語教育のための研究を進めていく中で「対話」の重要性を再認識したレベックさんの論文、視覚障害者が公共空間で安心して自立移動できる点字ブロックや音声表示などの物理的インフラ・情報誘導標識・社会的技術的取り組みなど利用者の視点に立つ日本文化を評価した何佳鑫(カケイキン)さんの論文、近年増えているアニメ・コミック・ゲーム(ACG)を動機に来日する留学生が実際には想像とは異なった日本での日常生活に直面して悩むことが多い中で、そうした留学生にアニメやゲームなどを用いた克服手段を提案する詹雪櫻(センユキオ)さんの論文、これら三つの作品はどれも観点が面白く、また合理的な解決策を提案しているところが評価されました。

奨励賞は、七点選考しました。姜尚昆(キョウシュウコン)さんの「地方都市における多文化共生を参加型へ転換する」、薛何(セツカ)さんの「オーバーツーリズムにおけるマナー違反に関する考察」、Won YUSHIN(ウォン・ユシン)さんの「日韓防災経営システムの融合によるグローバル専門家への成長」、范文瓊(ハンブンケイ)さんの「社会人向け中国語教育の現状と提案策」、EVAN TOBIAS TANONI(エヴァン・ドビアス・タノニ)さんの「留学体験が導いた木造防災建築への決意」、MEIG KAINAN(メイグ・カイナン)さんの「多文

化共生とウェルビーイング」、YAU JIA YEE(ヤオ・ジャー・イー)さんの「日本人と外国人の壁を乗り越える」です。タイトルに示唆されているように、日本の防災対策の特異性、留学生としての海外でのアイデンティティギャップ、その中での多文化共生の模索、そして観光大国を目指せば当然直面しなければならないオーバーツーリズム問題など、奨励賞の各論文は今日日本社会が直面しているアクチュアルなテーマを正面からとらえた質の高い論文でした。

最後に、本論文コンクールのような機会に、私たちが国際交流の分野で直面する実情とその克服の解決策について改めて論点を再確認し、議論していくことが重要だという気持ちを新たにしました。

受賞作品は大学セミナーハウスの HP に公開されますので、ぜひ皆さんも一度アクセスしてお読みください。今後さらに多くの留学生に大学セミナーハウス主催の「留学生論文コンクール」に関心を持っていただき、応募していただくことを大いに期待する次第です。